

国立国語研究所学術情報リポジトリ

鹿児島県大島郡龍郷町浦

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-05-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 重野, 裕美, 白田, 理人 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003554

鹿児島県大島郡龍郷町浦*

重野裕美^a

白田理人^b

^a広島経済大学／奄美看護福祉専門学校

^b広島大学

1. はじめに

琉球諸語は鹿児島県の奄美群島（喜界島・奄美大島・加計呂麻島・請島・与路島・徳之島・沖永良部島・与論島）から沖縄県にわたって伝統的に話されている言語である。ほとんどの地域では現代日本語共通語への言語推移が進行している。（いわゆる）伝統方言話者の高齢化が進んでいるため、詳細かつ総合的な記述研究や資料収集調査が喫緊の課題である。

北琉球奄美大島浦方言（以下浦方言）は、鹿児島県大島郡龍郷町浦集落で話されている方言である（図1参照）。



図1 琉球諸方言圏における奄美大島龍郷町浦集落の位置¹

本稿では、調査で得られたデータをもとに浦方言の文法を概観する。データは筆者が2016年から2021年まで行った調査で得たものを主に用いる²。また、文法記述の内容に関して、これまでの筆者の報告（Shigeno 2010, 重野 2012, 重野 2015a, 重野 2015b, 重野・白田 2016, 重野 2016a, 重野 2016b, 重野 2018）を再構成して用いたものがある。

* 本稿の執筆に際しては、（故）川畑キヨ子氏、重野寛輝氏、重野洋子氏、重原義和氏、重原裕子氏、新島一輝氏、新島夏江氏、山下ツヤ子氏（50音順）の多大なご協力が不可欠であった。改めて心より感謝を申し上げる。本稿に含まれる分析の誤りや不備は、すべて筆者の責任である。今後も 話者の方々及び他の研究者の方々のご協力を得ながら、浦方言の記録保存に努めたい。

本研究は国立国語研究所基幹型共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」，JSPS24720180「琉球語奄美方言文法記述のための基礎研究」，JSPS15K16754「与路島・請島を中心とした奄美大島方言の記述的研究」の成果の一部である。

¹ 国土地理院発行の地図データをもとに Thomas Pellard (INALCO-CRLAO) 氏が作成し、白田が編集した地図を用いている。

² 調査データは、（故）川畑キヨ子氏（1929年生まれ）、重野寛輝氏（1950年生まれ）、重原義和氏（1944年生まれ）、新島一輝氏（1932年生まれ）、新島夏江氏（1933年生まれ）、山下ツヤ子氏（1933年生まれ）の話者から得られたものを扱う（50音順）。

以下、第2節で浦方言の概要を述べ、第3節で音韻論、第4節で名詞の形態論、第5節で動詞の形態論、第6節で形容詞形態論、第7節で疑問詞、第8節で取り立て助詞、第9節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 浦方言の概略

本節では、浦集落の地理・系統・歴史（2.1）、生業・文化（2.2）、浦方言話者（2.3）について、龍郷町誌民俗編さん委員会編（1988）を参考にしながら述べる³。

2.1 地理・系統・歴史

奄美大島龍郷町浦集落は、東シナ海に面した海岸線が二つの岬により大きく形成された龍郷湾の奥に位置している。浦集落の北側と西側には山があり、その山すその平地に集落が広がっている。

浦方言は鹿児島県大島郡龍郷町浦（奄美大島）集落で話されている。系統的に、北琉球奄美語に属する（琉球諸語の系統関係についてはペラール（2016）を参照）。言語地理学的に奄美大島の方言区画は現地住民から「北大島方言」と呼ばれる地域（奄美市（旧笠利町・旧名瀬市・旧住用村）・龍郷町・大和村）と「南大島方言」と呼ばれる地域（宇検村・瀬戸内町）に大別される。北大島方言と南大島方言は語彙や文法事象が異なる点もあるが、相互理解度は非常に高い。

昭和40年に役場の庁舎が瀬留集落から浦集落へ移設され、公共施設や医療機関・金融機関などが建ち、町の中心部として発展している。

2.2 生業・文化

本節では浦集落の生業や文化について述べる。北大島地域も南大島地域も農業（サトウキビ、マンゴー、タンカンなど）が中心である。

集落行事については、年齢によって構成された組織が中心となって運営されている（青年団：30歳まで、壮年団：31歳～50歳、婦人会：結婚後～64歳、老人会65歳以上）。年中行事の中心的な担い手は青年団・婦人会が主であったが、若年層の減少とともに浦集落の代表的な行事である八月十五夜の綱引き・相撲も行われなくなった。また、ほかの奄美諸地域同様、即興の歌（シマ唄）が広く浸透し、冠婚葬祭や旅人をもてなす際など、場面に応じてさまざまなシマ唄がうたわれてきたが、この歌謡文化は流暢な方言話者が少なくなるにつれ、すたれてきている。口承文芸についても同様であり、現在、物語や伝説を方言によって語ることのできる方言話者はごくわずかである。

³ 浦方言の概略に関しては主に重野（2015a、2015b）に基づきながら、人口・世帯数に関しては現在の情報に修正している。

2.3 浦方言話者

浦集落は385世帯あり、住民は624人である⁴。方言を聞いて理解し、ある程度方言を用いて会話することが可能な話者は50歳以上だと考えられるので、浦方言話者はより少なくなる。

浦方言話者は老年層・中年層・若年層に分けられる。老年層（70代以上）は、第一言語として（いわゆる伝統的な）浦方言を話す。一方で、方言と共通語が混ざった地域共通語（トン普通語）も話せる。方言の地域差を自覚しており、他集落の人が話すとどのあたりの地域の出身かが分かる。中年層（40～60代）は第一言語として、浦方言に近い地域共通語を話す。方言をある程度聞いて理解できる話者が多いが流暢には話せない人が多い。若年層（30代以下）は第一言語として、現代日本語共通語に近い地域共通語を話す。方言を聞いて理解することも話すこともできない人が多い。

3. 音韻論

3.1 音素目録

3.1.1 母音音素

表1に浦方言の母音音素目録を示す。主に語頭に長母音が見られることがあり、本稿ではこれを短母音の連続として解釈している（e.g. /tuurjuN/ [tu:rijun] 「通る」, cf. /turjuN/ [turjun] 「取る」）。ただし、1音節語には母音の長短の区別が曖昧なものが見られる（e.g. /tii/~/ti:i/ 「手」）。語頭の母音の前には声門閉鎖音[?]が現れる（e.g. /amii/ [ʔamii]）。/i/及び/ë/は、舌の最も高い位置が前舌母音よりも若干後ろで、かつ、舌根を後ろに引いて咽頭を狭めて調音されているようである。ただし、先行する子音によって音色に違いがあり、また、子音から母音の入渡りにかけて音色が変化する。/i/と/ii/（及び/e/と/ë/）の対立が見られるのは、両唇音／軟口蓋音に後続する場合に限られる（e.g. /ami/ [ʔamii] 「網」, /amii/ [ʔamii] 「雨」, /ki/ [ki] 「来る（不定形）」, /ki:/ [ki] 「木」）。表1に示した音素のほか、応答表現には鼻母音が現れることがある（e.g. [ʔõ:] 「はい」）。

表1 浦方言の母音音素目録

	前舌		奥舌	
狭	i[i]	ii[i]	u[u]	
	e[e]	ë[e]	o[o]	
広		a[a]		

3.1.2 子音音素

表2に浦方言の子音音素目録を示す。無声破裂音について、歯茎音と軟口蓋音では喉頭化音／非喉頭化音の対立があるのに対し、両唇音では対立がなく、頭子音の場合、音声的には喉頭化音として実現する（e.g. /paN/ [p^ʔaN] 「パン」）。破擦音及び摩擦音は/i/または/j/に先行する場合口蓋

⁴ 2021年10月末現在：龍郷町役場調べ（龍郷町HP：<http://www.town tatsugo.lg.jp/kikakukanko/chose/machinoshokai/ura.html>、閲覧日：2021年11月14日）。

化する（e.g. /tacjuN/ [t^qt^{eu}N] 「立つ」， /sima/ [sⁱm^a] 「島」， /higi/ [hⁱgⁱ] 「髭」）。/h/は/u/または/w/が後続する場合唇音化する（e.g. /hunⁱ/ [h^unⁱ] 「船」， /hwëza/ [h^wëz^a] 「トンボ」）。/N/は発話末では口蓋垂音[N]だが、後続する音に同化して様々な鼻音として実現する。喉頭化／非喉頭化の対立は、語頭のみに見られる。

表2 浦方言の子音音素目録

		両唇	歯茎～		軟口蓋～ 口蓋垂～声門
			硬口蓋		
破裂音	無声	非喉頭化	p[p~p [?]]	t[t]	k[k]
		喉頭化		t'[t']	k'[k']
破擦音	有声		b[b]	d[d]	g[g]
	無声	非喉頭化		c[ts~t ^ç]	
摩擦音	無声	喉頭化		c'[t ^s ~t ^ç ']	
	有声			s[s~θ~ç]	h[h~ɸ~χ]
鼻音	無声	非喉頭化	m[m]	n[n]	N[N~n~m~ŋ~ñ]
		喉頭化	m'[m [?]]	n'[n [?]]	
はじき音				r[r]	
接近音	非喉頭化	w[w]		j[j]	
	喉頭化	w'[w [?]]		j'[j [?]]	

3.2 音節構造とモーラ

表3に浦方言の音節構造を示す。C₁には/N/以外のすべての子音が現れる。C₂には/j/または/w/が現れる（e.g. /harja/ 「柱」， /k'waagⁱ/ 「桑の木」）。/w/がC₂に現れる場合， C₁は/k/・/k'/・/g/・/h/のいずれかに限られる（/kwëesa/ 「辛い」， /k'wa/ 「子」， /toNgwa/ 「小さいさつまいも」， /hwï/ 「屁」）。V₁V₂の組み合わせは、同じ母音（e.g. /haasa/ 「赤い」， /moocⁱ/ 「6つ」），もしくは、V₂が/i/のもの（e.g. /kai/ 「粥」， /kui/ 「声」， /koimuN/ 「買い物」）に概ね限られる。C₃は語末では/N/に限られる。語中のC₃の鼻音は後続する子音と調音点が同化しており、本稿ではこれを/N/として解釈している（e.g. /aNma/ [ʔamm^a] 「おばあさん」 /jiNga/ [jin^gga] 「男」）。語中では、/N/のほかに、無声破裂音／破擦音（／摩擦音）に先行する調音点の同じ無声閉鎖音（／摩擦音）がC₃となる（e.g. /akka/ [ʔakk^a] 「あれが」 /gatta/ [gatt^a] 「バッタ」， /kutcaN/ ⁵ [kuttsan] 「殺さない」， /jassa/ [jassa] 「安い」）。V₁， V₂及びC₃は1モーラの長さを持つ。なお、歯擦音の重子音化は随意的な場合がある（e.g. /asja/～/assja/ 「明日」）。

⁵ /c/に先行する[^l]について、後続する/c/と合わせて重子音とと解釈する積極的な根拠がなく、/t/が後続する場合の[^l]と音声上違いがないので、これと統一して/t/として解釈している。

表3 浦方言の音節構造

頭子音	母音	尾子音
(C ₁)(C ₂)	V ₁ (V ₂)	(C ₃)

3.3 アクセント

アクセントの詳細については未調査である。北大島方言の先行研究(上野 1996a, 1996b, 1996c, 1997, 1999)によれば、アクセントの語彙的区別が見られるものの、他地域の「類」とは対応せず、音変化によって新たなアクセント対立が生じた結果であると考えられる。

4. 名詞の形態論

4.1 名詞の内部構造

4.1.1 單数と複数

複数は、接辞-*kja/-ta/-Nkja で標示される。人称代名詞には-*kja* が用いられる (e.g. *j'a-kja* 「お前たち」, cf. *j'a* 「お前」)。人を表す指示代名詞／疑問代名詞、及び、呼称名詞には-*ta* が用いられる (e.g. *tat-ta* 「誰 (複数)」, *at-ta* 「彼ら (あの人たち)」, *taroo-ta* 「太郎たち」, cf. *taru* 「誰」, *ari* 「彼 (あの人)」, *taroo* 「太郎」)。それ以外の名詞には-*Nkja* (末尾が/N/の場合は異形態-*nuNkja* または-*kja*) が用いられる (e.g. *uja-Nkja* 「親たち」, *jiNga-Nkja* 「男たち」, *iN-nuNkja~iN-kja* 「犬たち」, cf. *uja* 「親」, *jiNga* 「男」, *iN* 「犬」)。ただし、呼称名詞である親族名詞には、-*ta* も-*Nkja* も用いられる (e.g. *c'jaN-ta* 「お父さんたち」, *aNm-a-Nkja* 「おばあさんたち」, *c'jaN* 「お父さん」, *aNm-a* 「おばあさん」)。なお、-(*nu*)*Nkja* は、曖昧性を表す取り立て助詞=(*nu*)*Nkja* と同形である。人を表す代名詞・呼称名詞以外は、複数の標示は義務的ではない。無生名詞に後続した(*nu*)*Nkja* は複数接辞ではなく取り立て助詞となるようである。*

4.1.2 接辞

小さいもの、幼いものには指小辞-*kkwa* (末尾が/N/の場合には異形態-*gwa*) が用いられる (e.g. *maja-kkwa* 「子猫」, *toN-gwa* 「小さいサツマイモ」, cf. *maja* 「ネコ」, *toN* 「サツマイモ」)。

4.2 代名詞の構造と体系

4.2.1 人称代名詞の体系

表4に浦方言の人称代名詞の体系を示す⁶。双数を複数から区別することは義務的ではない。また、一人称代名詞において除外と包括の形式的区別はない。人称代名詞は、属格助詞を伴わずに名詞修飾を行うことがある (e.g. *wa-kja k'wasi* 「私たちのお菓子」, cf. *taroo=nu ututu* 「太郎の弟」)。末尾に/N/を持つ *waN* 及び *naN* は、数接辞または主格助詞=*ga* が後続すると/N/を伴わない異形態として現れる (e.g. *wa=ga* 「私が」, *na=ga* 「あなたが」, cf. *c'jaN=ga* 「お父さんが」)。「名詞

⁶ 主に重野・白田 (2016) に基づいている。

X+共格助詞=tu+人称代名詞双数形」の形で、Xと話し手もしくは聞き手の二人を指すことができる（e.g. *akira=tu wa-ttari* 「アキラと私の二人」）。

表4 浦方言の人称代名詞の体系

		単数	双数	複数
一人称		<i>waN</i>	<i>wa-ttari</i>	<i>wa-kja</i>
二人称	非敬称	<i>j'a(a)</i>	<i>j'a-ttari</i>	<i>j'a-kja</i>
	敬称	<i>naN</i>	<i>na-ttari</i>	<i>na-kja</i>

4.2.2 指示代名詞（指示詞）の体系

表5に浦方言の指示詞の体系を示す⁷。近称は話し手に近い対象、中称は話し手または聞き手に近い対象、遠称は話し手からも聞き手からも遠い対象に用いられる。物／人を表す指示代名詞（末尾が/r/+狭母音の形式）に主格助詞／属格助詞がつくと、名詞末尾が促音化する（e.g. *ak=ka* 「あれ（の人）が／あれ（の人）の」）。

表5 浦方言の指示詞の体系

		共通語訳	近称	中称	遠称
名詞	物～人	これ～この人／それ～ その人／あれ～あの人		<i>kuri</i>	<i>uri</i>
	場所	ここ／そこ／あそこ	<i>kuma</i>	<i>uma</i>	<i>ama</i>
連体詞	基本	この／その／あの	<i>kuN</i>	<i>uN</i>	<i>aN</i>
	様態	こんな／そんな／あんな	<i>kassjaN</i>	<i>ugasjaN</i>	<i>agasjaN</i>
副詞	様態	こう／そう／ああ	<i>kassi</i>	<i>ugaasi</i>	<i>agaasi</i>
	方向	こっちへ／そっちへ／あっちへ	<i>kaN</i>	<i>ugaN</i>	<i>agaN</i>

4.3 数詞の体系と構造

表6に、代表的な数詞である「～人」（人間）、「～つ」（一般）の1～10までの表現をあげる。人間の場合、5人以上は数詞語幹に-niN「人」を後続させる。一般的の場合、1～9は数詞語幹に-ci「～つ」を後続させ、10はtuuとなる。

⁷ 名詞に関しては、主に重野・白田（2016）に基づいている。

表 6 数詞の表現の例

類別対象	人	一般
1	<i>c'juuri</i>	<i>t'ici</i>
2	<i>t'aari</i>	<i>t'aaci</i>
3	<i>misjari</i>	<i>miici</i>
4	<i>jutari</i>	<i>juuci</i>
5	<i>goniN</i>	<i>isici</i>
6	<i>rokuniN</i>	<i>mooci</i>
7	<i>siciniN</i>	<i>nanaci</i>
8	<i>haciniN</i>	<i>jaaci</i>
9	<i>kjuuniN</i>	<i>konoci</i>
10	<i>zjuuniN</i>	<i>tuu</i>

上記の他、類別接辞として-*kéri* 「～回」 (e.g. *c'jukéri* 「1回」, *t'akéri* 「2回」, *mikéri* 「3回」, *jukéri* 「4回」) などがあるが、その他の類別接辞については未調査である。

4.4 格の種類と機能

表 7 に浦方言の格の種類と機能を示す⁸。主格 1=*ga* は人を表す代名詞、呼称名詞（呼称として用いられる人名、親族名詞）にのみ用いることが多いが、名詞述語などで名詞の種類によらず主格 1=*ga* が用いられることがある。主格 3=*nu* は代名詞、呼称名詞以外のその他の名詞に用いられる。主格 2 及び属格 2=*ka* は、指示代名詞／疑問詞代名詞のうち末尾が/r/+狭母音の形式に用いられる (e.g. *ak=ka* 「あれ（あの人）が／あれ（あの人）の」, *tak=ka* 「誰が／誰の」, cf. *ari* 「あれ（あの人）」, *taru* 「誰」)。他動詞目的語は、対格助詞がつかず無助詞となることがある。処格には様々な形式が見られるが、機能の相違の詳細は不明である（個人差の可能性もある）。奪格が授与者を標示する場合、形式名詞 *më(e)* 「前」を伴うことがある (e.g. *uja=nu mëë=ra kicjaN* （親=属格 1 前=奪格 聞く.過去）「親から聞いた（lit. 親の前から聞いた）」)。

⁸ 主に重野 (2016b) に基づいているが、主格 2=*ka*, 処格 5=*ni* を追加している。

表 7 浦方言の格の種類と機能

機能		
主格 1	=ga	動作, 変化, 状態の主体
主格 2	=ka	動作, 変化, 状態の主体
主格 3	=nu	動作, 変化, 状態の主体
属格 1	=nu/=N	所有者, 関係物, 経験者, 部分, 同格
属格 2	=ka	所有者, 関係物, 経験者, 部分, 同格
対格	=ba	動作の対象, 経路
与格	=Nzi	伝達相手, 受益者, 直面対象, 受け身の動作主, 使役の動作主
処格 1	=naN	存在・出来事の場所, 着点, 経路
処格 2	=naNti	存在・出来事の場所
処格 3	=zi	存在・出来事の場所
処格 4	=naNzi	存在・出来事の場所
処格 5	=ni	時間
具格	=si	手段, 理由
方向格	=(t)ci	移動の結果, 移動の目標, 移動着点
奪格	=ra/=raga	起点, 事態の順序, 授与者
限界格	=gari	限界点
共格	=tu	共同, 手段
比較格	=(N)kuma/=iNma	比較

5. 動詞の形態論

5.1 屈折形態論

本稿では、文末終止の機能を持つ動詞を定動詞とよび、定動詞を副詞的に修飾する動詞を副動詞とよび分ける⁹。動詞の内部構造は表 8 のように一般化できる。

表 8 浦方言の動詞の内部構造

構造	
定動詞	語根－派生接辞－極性－テンス／ムード
副動詞	語根－派生接辞－極性－テンス－副動詞接辞

⁹ 5.1 では主に重野（2015a、2015b）に基づき議論する。ただし、5.1.1 の動詞の語幹クラスについては重野（2015a、2015b）における折衷型語幹を混合型語幹としている。また、一部、形態素境界等を修正・変更した箇所がある。

5.1.1 動詞の語幹クラス

本節では、語幹末音及び接辞異形態によって動詞の語幹の形態的分類（以降、語幹クラス）を設ける。まず、①非過去接辞が(j)u という音列を含み、かつ、②不定接辞が-i で現れる動詞を子音語幹動詞に分類する。①、②とも満たさない動詞は母音語幹動詞に分類する。①を満たさず、②を満たす動詞は混合型語幹動詞に分類する。「する」「来る」「見る」「言う」「ある」の意味に相当する動詞に関しては、他の動詞と異なるふるまいをするため、子音語幹動詞・母音語幹動詞・混合型語幹動詞には分類せず、不規則動詞として扱う。

過去形など、初頭が歯茎音の接辞が用いられる接辞は、母音語幹動詞に後続する場合には初頭に t が現れるが、子音語幹動詞及び混合型語幹動詞では t 以外に語幹クラスに応じて d, c(j), z(j), s(j) を初頭に持つ異形態で現れる。表 9 に（大まかな）語幹クラスと語例を示す¹⁰。

¹⁰ この他、痕跡を表す接辞-(t)ari (e.g. *ka-dari* 「食べてある」)，主に子音語幹動詞について習慣過去などを表す接辞-jutan (e.g. *kam-jutan* 「食べていた」) がある。

表9 浦方言の動詞語幹クラス

語幹 クラス	語幹	意味	否定	非過去	不定	中止	
子音語幹	b	tub-	飛ぶ	tub-aN	tub-juN	tub-i	tu-taN
	w	kow-	買う	kow-aN	ko-juN	ko-i	ko-taN
	m	kam-	食べる	kam-aN	kam-juN	kam-i	ka-daN
	t	mut-	持つ	mut-aN	muc-juN	muc-i	mut-cjaN
	s	hwus-	干す	hus-aN	hus-juN	hus-i	hu-sjaN
	n	sin-	死ぬ	sin-aN	sin-juN	sin-i	si-zjaN
	k1	jak-	焼く	jak-aN	jak-juN	jak-i	ja-sjaN
	k2	kik-	聞く	kik-aN	kik-juN	kik-i	ki-cjaN
	k3	ik-	行く	ik-aN	ik-juN	ik-i	i-zjaN
	g	og-	扇ぐ	og-aN	og-juN	og-i	o-zjaN
	r1	tur-	取る	tur-aN	tur-juN	tur-i	tu-taN
	r2	nir-	煮る	nir-aN	nir-juN	nir-i	ni-sjaN
	r3	hasir-	走る	hasir-aN	hasir-juN	hasir-i	hasi-cjaN
混合型語幹	r4	wu(r)-	居る	wur-aN	wu-N	wur-i	wu-taN
	r5	m'o(r)-	行く／来る (尊敬)	m'or-aN	m'o-N	m'or-i	m'o-sjaN
母音語幹	i	izi-	出る	izi-raN	izi-N	izi	izi-taN
	ï	uri-	降りる	uri-riN	uri-N	uri	uri-taN
	e	jee-	痩せる	jee-raN	je-N	jee	jee-taN
	ë	këë-	替える	këë-raN	këë-N	këë	këë-taN
	u	hu-	起きる	hu-raN	hu-N	huu	hu-taN
	o	ho-	開ける	ho-raN	ho-N	hoo	ho-taN
不規則	s(i)-		する	sii-raN	s-juN	si(i)	sjaN
	k-(/ki-/ku-)		来る	ku-N	k-juN	ki(i)	si-cjaN
	nj-/ni-		見る	nj-aN	nj-uN	ni(i)	ni-sjaN
	j'-/i-		言う	j'-aN	j'-uN	i(i)	i-sjaN
	ar-(/në-)		ある	në-N	a-n	ar-i	a-taN

5.1.2 定動詞

動詞語幹に後接する定動詞接辞の機能と語例を表10にまとめた。語例としてnarab-「並

ぶ」，*nagi-*「投げる」，*misjo(r)-*「めしあがる」をあげる。1,2など番号で区別している形式は、後続する文末助詞及び現れる文タイプが異なる（本稿ではそれぞれの機能の詳細は割愛する）。

表 10 に示した形式は基本的に单文／主節の述語にのみ用いられるが、末尾に/N/を持つ形式（非過去肯定 2 -(ju)N, 非過去否定 -raN, 過去 1 -taN）は、加えて、名詞句に前置され、これを修飾する連体節を導く機能や、=kana（理由）や=nisi（比況）などの接続助詞を後に伴い従属節をつくる機能をもつ。

表 10 子音語幹動詞・母音語幹動詞・混合型語幹動詞に後接する定動詞接辞

機能	定動詞接辞	子音語幹動詞	母音語幹動詞	混合型語幹動詞	
		<i>narab-</i> 「並ぶ」	<i>nagi-</i> 「投げる」	<i>misjo(r)-</i> 「めしあがる」	
意思・勧誘法 「～しよう」	肯定 -(r)o 否定 —	<i>narab-o</i> —	<i>nagi-ro</i> —	<i>misjo-ro</i> —	
命令法 「～しろ」	肯定（命令） -(r)i 否定（禁止） -una/-Nna	<i>narab-i</i> <i>narab-una</i>	<i>nagi-ri</i> <i>nagi-Nna</i>	<i>misjo-ri</i> <i>misjo-Nna</i>	
直接法	非過去 「～する」	肯定 1 -(ju)ri 肯定 2 -(ju)N 否定 -(r)aN	<i>narab-juri</i> <i>narab-juN</i> <i>narab-aN</i>	<i>nagi-ri</i> <i>nagi-N</i> <i>nagi-raN</i>	<i>misjo-ri</i> <i>misjo-N</i> <i>misjo-raN</i>
	過去 「～した」	肯定 1 -(t)aN 肯定 2 -(t)a 肯定 3 -(t)i 否定 1 -(r)aN-taN 否定 2 -(r)aN-ta 否定 3 -(r)aN-ti	<i>nara-daN</i> <i>nara-da</i> <i>nara-di</i> <i>narab-aN-taN</i> <i>narab-aN-ta</i> <i>narab-aN-ti</i> <i>(narab-aN-zii)</i>	<i>nagi-taN</i> <i>nagi-ta</i> <i>nagi-ti</i> <i>nagi-raN-taN</i> <i>nagi-raN-ta</i> <i>nagi-raN-ti</i> <i>(nagi-raN-zii)</i>	<i>misjo-taN</i> <i>misjo-ta</i> <i>misjo-ti</i> <i>misjo-raN-taN</i> <i>misjo-raN-ta</i> <i>misjo-raN-ti</i> <i>(misjo-raN-zii)</i>
		非過去 「～するだろう」	<i>narab-ju-ro</i> —	<i>nagi-ro</i> —	<i>misjo-ro</i> —
		過去 「～しただろう」	<i>nara-da-ro</i> <i>nara-baN-ta-ro</i>	<i>nagi-ta-ro</i> <i>nagi-raN-ta-ro</i>	<i>misjo-ta-ro</i> <i>misjo-raN-ta-ro</i>
		非過去	<i>narab-ju-ru</i> —	<i>nagi-ru</i> —	<i>misjo-ru</i> —
		過去	<i>nara-d-a-ru</i> <i>narab-aN-ta-ru</i>	<i>nagi-ta-ru</i> <i>nagi-raN-ta-ru</i>	<i>misjo-ta-ru</i> <i>misjo-raN-ta-ru</i>
		—	—	—	—
推量法	非過去	肯定 -(ju-)ro 否定 —	—	—	—
	過去	肯定 -(t)a-ro 否定 -(r)aN-ta-ro	—	—	—
強調法	非過去	肯定 -(ju-)ru 否定 —	—	—	—
	過去	肯定 -(t)a-ru 否定 -(r)aN-ta-ru	—	—	—

5.1.3 副動詞

副動詞接辞として、不定-*i*, 目的-(*i*)*ga*, 同時-(*i*)*gacina*, 繰起-*tī*, 並列-*tari*, 条件-*riba*, 状況-*tattu*を語幹のタイプ別に提示する。副動詞接辞のうち、否定をとれるのは継起、並列、条件、状況であり、過去をとれるのは条件形だけである。表 11 に、子音語幹動詞・母音語幹動詞・混合型語幹動詞に後接する定動詞接辞の語例を示す。

表 11 子音語幹動詞・母音語幹動詞・混合型語幹動詞に後接する副動詞接辞

機能	副動詞接辞	子音語幹動詞	母音語幹動詞	混合型語幹動詞
		<i>narab-</i> 「並ぶ」	<i>nagi-</i> 「投げる」	<i>misjo(r)-</i> 「めしあがる」
不定「～し」	- <i>i</i>	<i>narab-i</i>	<i>nagi</i>	<i>misjor-i</i>
目的「～しに」	-(<i>i</i>) <i>ga</i>	<i>narab-iga</i>	<i>nagi-ga</i>	<i>misjor-iga</i>
同時「～しながら」	-(<i>i</i>) <i>gacina</i>	<i>narab-igacina</i>	<i>nagi-gacina</i>	<i>misjor-igacina</i>
継起「～して」	肯定 -(<i>t</i>) <i>tī</i>	<i>nara-dī</i>	<i>nagi-tī</i>	<i>misjo-tī</i>
	否定 -(<i>r</i>) <i>aN-zī</i> (<i>narab-aN-tī</i>)	<i>narab-aN-zī</i> (<i>nagi-aN-tī</i>)	<i>nagi-raN-zī</i> (<i>nagi-raN-tī</i>)	<i>misjo-raN-zī</i> (<i>misjo-raN-tī</i>)
並列「～したり」	肯定 -(<i>t</i>) <i>ari</i>	<i>nara-dari</i>	<i>nagi-tari</i>	<i>misjo-tari</i>
	否定 -(<i>r</i>) <i>aN-tari</i>	<i>narab-aN-tari</i>	<i>nagi-raN-tari</i>	<i>misjo-raN-tari</i>
条件 「～すれば」	肯定 -(<i>r</i>) <i>iба</i>	<i>narab-iба</i>	<i>nagi-riba</i>	<i>misjo-riba</i>
	否定 -(<i>r</i>) <i>aN-ba</i>	<i>narab-aN-ba</i>	<i>nagi-aN-ba</i>	<i>misjo-ran-ba</i>
過去 「～したのなら」	肯定 -(<i>t</i>) <i>a-riba</i>	<i>nara-da-riba</i>	<i>nagi-ta-riba</i>	<i>misjo-ta-riba</i>
	否定-(<i>r</i>) <i>aN-ta-riba</i>	<i>narab-aN-ta-riba</i>	<i>nagi-raN-ta-riba</i>	<i>misjo-ran-ta-riba</i>
状況「～したら」	肯定 -(<i>t</i>) <i>tattu</i>	<i>nara-dattu</i>	<i>nagi-tattu</i>	<i>misjo-tattu</i>
	否定 -(<i>r</i>) <i>aN-tattu</i>	<i>narab-aN-tattu</i>	<i>nagi-raN-tattu</i>	<i>misjo-raN-tattu</i>

5.2 派生形態論

5.2.1 ヴォイス

受け身および可能は-(*r*)*ari-* (e.g. *jum-ari-N* 「読まれる／読める」), 心的／能力可能は-(*i*)*kir-* (e.g. *jum-ikir-juN* 「読める」), 使役は-(*r*)*as-* (e.g. *jam-as-juN* 「読ませる」) を動詞語根に後接させて標示する¹¹。

5.2.2 アスペクト

進行・結果は-(*t*)*u(r)-* (e.g. *ju-du-N* 「読んでいる」) を動詞語根に後接させて標示する。

¹¹ 5.2 は主に重野 (2012, 2015a, 2015b, 2018) に基づいている。

5.2.3 待遇

尊敬は-*(iN)sjo(r)-* (e.g. *jam-isjo-N*「読みなさる」), 丁寧は-*(r)jo(r)-* (e.g. *jam-jo-N*「読みます」)を動詞語根に後接させて標示する。

5.3 存在動詞・コピュラ動詞

存在動詞とコピュラ動詞の語例として, 定動詞接辞が後接する語形を表 12 に, 副動詞接辞が後接する語形を表 13 に示す。

表 12 存在動詞とコピュラ動詞に後接する定動詞接辞

機能		定動詞接辞	存在動詞		コピュラ動詞
			<i>wu(r)-</i> 「居る」	<i>a-/nē-</i> 「ある」	<i>zja/a(n)-/da-</i> 「だ」
意思・勧誘法 「～しよう」	肯定 <i>-ro</i> 否定 —	<i>wu-ro</i> —	—	—	—
命令法 「～しろ」	肯定 (命令) <i>-ri</i> 否定 (禁止) <i>-na</i>	<i>wu-ri</i> <i>wun-na</i>	—	—	—
直接法	非過去 「～する」	肯定 1 <i>-ri</i> 肯定 2 <i>-n</i> 否定 <i>-(ra)N</i>	<i>wu-ri</i> <i>wu-n</i> <i>wu-raN</i>	<i>a-ri</i> <i>a-n</i> <i>nē-N</i>	<i>zja</i> — <i>an-aN</i>
	過去 「～した」	肯定 1 <i>-taN</i> 肯定 2 <i>-ta</i> 肯定 3 <i>-ti</i> 否定 1 <i>-(ra)N-taN</i> 否定 2 <i>-(ra)N-ta</i> 否定 3 <i>-(ra)N-ti</i>	<i>wu-taN</i> <i>wu-ta</i> <i>wu-ti</i> <i>wu-raN-taN</i> <i>wu-raN-ta</i> <i>wu-raN-ti</i> <i>(wur-aN-zii)</i>	<i>a-taN</i> <i>a-ta</i> <i>a-ti</i> <i>nē-N-taN</i> <i>nē-N-ta</i> <i>nē-N-ti</i> <i>(nē-N-zii)</i>	<i>a-taN</i> <i>a-ta</i> <i>a-ti</i> <i>an-aN-taN</i> <i>an-aN-ta</i> <i>an-aN-ti</i> <i>(an-aN-zii)</i>
		非過去 「～するだろう」	<i>wu-ro</i> —	<i>a-ro</i> —	<i>da-ro</i> —
		過去 「～しただろう」	<i>wu-ta-ro</i> <i>wu-raN-ta-ro</i>	<i>a-ta-ro</i> <i>nē-N-ta-ro</i>	<i>a-ta-ro</i> <i>an-aN-ta-ro</i>
	非過去	肯定 <i>-ru</i> 否定 —	<i>wu-ru</i> —	<i>a-ru</i> —	—
	過去	肯定 <i>-ta-ru</i> 否定 <i>-raN-ta-ru</i>	<i>wu-ta-ru</i> <i>wu-raN-ta-ru</i>	<i>a-ta-ru</i> —	<i>a-ta-ru</i> —

存在動詞 *wu(r)*- 「居る」は、混合語幹動詞に分類される。存在動詞の *a(r)*- 「ある」 + 否定-*raN* は *nëN* という特別な形式をとる。コピュラ動詞の非過去・肯定の語幹は *zja* であるが、過去・肯定は *a-*、否定は *an-* を用いる。推量法のときは *da-* となる。

表 13 存在動詞とコピュラ動詞に後接する副動詞接辞

機能	副動詞接辞	存在動詞		コピュラ動詞
		<i>wu(r)</i> - 「居る」	<i>a-/në-</i> 「ある」	<i>a(n)</i> - 「だ」
不定「～し」	<i>-i</i>	<i>wur-i</i>	—	—
目的「～しに」	<i>-(i)ga</i>	—	—	—
同時「～しながら」	<i>-igacina</i>	<i>wur-igacina</i>	—	—
継起「～して」	肯定 <i>-tii</i> 否定 <i>-(ra)N-zii</i>	<i>wu-tii</i> <i>wu-raN-zii</i> (<i>wu-raN-tii</i>)	<i>a-tii</i> <i>në-N-zii</i>	<i>a-tii</i> <i>an-aN-zii</i>
並列「～したり」	肯定 <i>-tari</i> 否定 <i>-(ra)N-tari</i>	<i>wu-tari</i> <i>wu-raN-tari</i>	<i>a-tari</i> <i>në-N-tari</i>	<i>a-tari</i> <i>an-aN-tari</i>
条件	非過去 「～すれば」	肯定 <i>-riba</i> 否定 <i>-(ra)N-ba</i>	<i>wu-riba</i> <i>wu-raN-ba</i>	<i>a-riba</i> <i>në-N-ba</i>
	過去 「～したのなら」	肯定 <i>-ta-riba</i> 否定 <i>-(ra)N-ta-riba</i>	<i>wu-ta-riba</i> <i>wu-raN-ta-riba</i>	<i>a-ta-riba</i> <i>në-N-ta-riba</i>
状況「～したら」		肯定 <i>-tattu</i> 否定 <i>-(ra)N-tattu</i>	<i>wu-tattu</i> <i>wu-raN-tattu</i>	— <i>në-N-tattu</i>

5.4 不規則変化動詞

不規則変化動詞のうち *s(i)*- 「する」, *k(u)*- 「来る」を例に、定動詞接辞の後接する語例を表 14 に、副動詞接辞の後接する語例を表 15 に示す。

表 14 不規則変化動詞に後接する定動詞接辞

機能	定動詞接辞	不規則変化動詞		
		<i>s(i/i)-</i> 「する」	<i>k(u/i)-</i> 「来る」	
意思・勧誘法 「～しよう」	肯定 <i>-ro</i> 否定 —	<i>sii-ro</i> —	<i>kuu</i> —	
命令法 「～しろ」	肯定（命令） <i>-rii</i> 否定（禁止） <i>-una/-Nna</i>	<i>sii-rii</i> <i>sii-Nna</i>	<i>kuu</i> <i>k-una</i>	
直接法	非過去 「～する」	肯定 1 <i>-juri</i> 肯定 2 <i>-juN</i> 否定 <i>-raN</i>	<i>s-juri</i> <i>s-juN</i> <i>sii-raN</i>	<i>k-juri</i> <i>k-juN</i> <i>kuN</i>
	過去 「～した」	肯定 1 <i>-taN</i> 肯定 2 <i>-ta</i> 肯定 3 <i>-ti</i> 否定 1 <i>-raN-taN</i> 否定 2 <i>-raN-ta</i> 否定 3 <i>-raN-tii</i>	<i>sjaN</i> <i>sja</i> <i>si</i> <i>sii-raN-taN</i> <i>sii-raN-ta</i> <i>sii-raN-tii</i> <i>(sii-raN-zii)</i>	<i>(si)cjaN</i> <i>(si)cja</i> <i>(si)ci</i> <i>kuN-taN</i> <i>kuN-ta</i> <i>kuN-tii</i>
		肯定 <i>-ju-roo</i> 否定 —	<i>s-ju-roo</i> —	<i>k-ju-roo</i> —
		肯定 <i>-ta-ro</i> 否定 <i>-raN-ta-ro</i>	<i>sja-ro</i> <i>sii-raN-ta-ro</i>	<i>(si)cja-ro</i> <i>kuN-ta-ro</i>
	非過去	肯定 <i>-ju-ru</i> 否定 —	<i>s-ju-ru</i> —	<i>k-ju-ru</i> —
	過去	肯定 <i>-ta-ru</i> 否定 <i>-raN-ta-ru</i>	<i>sja-ru</i> <i>sii-raN-ta-ru</i>	<i>(si)cja-ru</i> <i>kuN-ta-ru</i>

表 15 不規則変化動詞に後接する副動詞接辞

機能	副動詞接辞	不規則変化動詞	
		<i>s(i/i)-</i> 「する」	<i>k(u/i)-</i> 「来る」
不定「～し」	<i>-i</i>	<i>si-i</i>	<i>ki-i</i>
目的「～しに」	<i>-iga</i>	<i>si-iga</i>	—
同時「～しながら」	<i>-igacina</i>	<i>si-igacina</i>	<i>ki-igacina</i>
継起「～して」	肯定 <i>-ti</i> 否定 <i>-raN-zī</i>	<i>si</i> <i>si-raN-zī</i> (<i>si-raN-tī</i>)	(<i>si)ci</i> <i>kuN-zī</i>
並列「～したり」	肯定 <i>-tari</i> 否定 <i>-raN-tari</i>	<i>sjari</i> <i>si-raN-tari</i>	<i>cjari</i> <i>kuN-tari</i>
条件	非過去 「～すれば」	肯定 <i>-riba</i> 否定 <i>-raN-ba</i>	<i>si-riba</i> <i>si-raN-ba</i>
	過去 「～したのなら」	肯定 <i>-ta-riba</i> 否定 <i>-raN-ta-riba</i>	<i>sja-riba</i> <i>si-raN-ta-riba</i>
状況「～したら」	肯定 <i>-tattu</i> 否定 <i>-raN-tattu</i>	<i>sjattu</i> <i>si-raN-tattu</i>	(<i>si)cjattu</i> <i>kuN-tattu</i>

6. 形容詞形態論¹²

6.1 基本構造

形容詞語幹は形容語根+形容詞化接辞 (*-sa/-sja/-ssja/-tcja/-ka*) からなる。*-sa/-sja/-ssja/-tcja* のいずれの接辞がつくかは形容語根によって一意に決まっている。*-ssja/-tcja* をとる形容語根には、それ以外の形容詞化接辞が-*ssja/-tcja* の代わりにつくことがないが、*-sa/-sja* をとる語根については、*-sa/-sja* の代わりに-*ka* がつくことがある。形容詞語幹は接辞を伴わずに述語として用いられる。

表 16 形容詞の例

語根	語幹	意味
<i>taa-</i>	<i>taa-sa/taa-ka</i>	高い
<i>uturu-</i>	<i>uturu-sja/uturu-ka</i>	怖い
<i>ji-</i>	<i>ji-tcja</i>	良い
<i>hu-</i>	<i>hu-ssja</i>	欲しい

¹² 形容詞の屈折接辞は主に重野（2015b）に基づきつつ、データを追加し論じている。

6.2 形容詞の屈折接辞

表 17 に、形容詞語幹に後接する屈折接辞を提示する。語例として、*taasa*「高い」をあげる。否定は形容語幹に否定の助動詞 *nēN* を後続させることで否定をあらわす。

表 17 形容詞「高い」の屈折パラダイムの一部

機能		形容詞の屈折接辞	
		肯定	否定
直説	非過去 1	<i>taasa-ri</i>	<i>taasa nēN</i>
	非過去 2	<i>taasa-N</i>	
	過去	<i>taasa-taN</i>	<i>taasa nēN-tan</i>
推量	非過去「～だろう」	<i>taasa-ro</i>	<i>taasa nēN da-ro</i>
	過去「～たろう」	<i>taasa-ta-ro</i>	<i>taasa nēN-ta-ro</i>
継起	非過去「～て」	<i>taasa-ti</i>	<i>taasa nēN-zj/nēN-ti</i>
並列	非過去「～たり」	<i>taasa-tari</i>	<i>taasa nēN-tari</i>
条件	非過去「～ば」	<i>taasa-riba</i>	<i>taasa nēN-ba</i>

6.3 品詞上の位置づけ

形容詞の活用は、存在動詞 *a(r)*-に準じるが、不定形が対応せず、また、語幹がそのまま述語になりうる。このため、動詞とは異なる品詞として形容詞を認める。なお、共通語の形容動詞と同様に、接辞-*na* を伴って名詞を修飾し、コピュラを伴って述語をなす語彙も見られる（e.g. *raku zja=ja*「楽だな」 *raku-na sigutu*「楽な仕事」）が、数が少ないため、品詞上は名詞に分類し、連体詞化接辞-*na* を認めることで処理する。

7. 疑問詞

表 18 に浦方言の疑問詞を示す。*taru*「誰」／*dīru*「どれ」に主格助詞（／属格助詞）がつくと、名詞末尾が促音化する（e.g. *tak=ka*「誰が／誰の」 *dīk=ka*「どれが」）。

表 18 浦方言の疑問詞

	共通語訳		形式
名詞	人	誰	<i>taru</i> (単数) , <i>tatta</i> (複数)
	物・動物	何	<i>nuu</i>
	選択	どれ	<i>dīru</i>
	場所	どこ	<i>daa</i> , <i>dīma</i>
	量・値段	いくら	<i>kjassa</i>
	数	いくつ	<i>ikuci</i>
連体詞	選択	どの	<i>dīN</i>
	様態	どんな	<i>kjassjaN</i>
副詞	様態	どう	<i>kjassi</i>
	理由	なぜ	<i>nuga</i>
	時	いつ	<i>icī</i>

8. 取り立て助詞

浦方言の取り立て助詞を以下の表に示す。焦点 1=*du* は主に対比焦点に用いる。焦点 2=*ga* は主に「何だっけ？」のような記憶の検索を伴う疑問詞疑問文において、疑問詞に後接する (e.g. *nu=tci=ga j'uru* (何=引用=焦点 2 言う.非過去.強調) 「何で言うんだっけ？」)。添加 3=*sima* は疑問詞もしくは 1 を表す数詞について全否定の構文に用いる (e.g. *taru=sima kuN* (誰=添加 3 来る.否定.非過去「誰も来ない」))。

表 19 取り立て助詞

ラベル	共通語訳	形式
主題	は	= <i>ja</i>
焦点 1		= <i>du</i>
焦点 2		= <i>ga</i>
添加 1	も	= <i>daka</i>
添加 2	まで	= <i>garī</i>
添加 3	も	= <i>sima</i>
限定	だけ	= <i>bēri</i>
曖昧	なんか	=(<i>nu</i>) <i>Nkja</i>

9. おわりに

本稿では、音韻論・形態論・機能語を中心に浦方言の文法体系について整理した。アクセント、連体詞、副詞、感動詞、接続助詞、終助詞に関する記述や文構造の統語的な記述は調査が不十分

な点もあるため、別稿に譲る。引き続き、データや談話資料を追加し、より実態に沿った記述を行うことが今後の課題である。

参照文献

- 上野善道 (1996a) 「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告：名詞の部」『琉球の方言』20: 26-57.
- 上野善道 (1996b) 「奄美大島笠利町諸方言の名詞のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』24: 149-261.
- 上野善道 (1996c) 「名瀬市芦花部・有良方言の名詞のアクセント体系」『東京大学言語学論集』15: 3-68.
- 上野善道 (1997) 「奄美大島佐仁方言のアクセント調査報告：用言の部」『琉球の方言』21: 1-42.
- 上野善道 (1999) 「奄美大島 龍郷町 方言の用言のアクセント資料」『アジア・アフリカ文法研究』28: 83-136.
- 龍郷町誌民俗編さん委員会編 (1988) 『龍郷町誌 民俗編』鹿児島県大島郡龍郷町教育委員会.
- 重野裕美 (2012) 「奄美大島龍郷町浦方言の丁寧語」『広島大学日本語教育研究』22: 9-16.
- 重野裕美 (2015a) 「北琉球奄美大島浦方言の動詞形態論」『琉球の方言』39: 33-47.
- 重野裕美 (2015b) 「北琉球奄美大島浦方言の文法概説—中間報告（動詞・形容詞）—」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語・記述文法：消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究 I』22-46. 沖縄：琉球大学.
- 重野裕美 (2016a) 「奄美語龍郷町浦方言のテンス・アスペクト・モダリティ（中間報告）」狩俣繁久 (編) 『琉球諸語・記述文法：消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究III』32-46. 沖縄：琉球大学.
- 重野裕美 (2016b) 「北琉球奄美大島龍郷町浦方言の格標識」『広島経済大学研究論集』39(1・2): 81-92.
- 重野裕美・白田理人 (2016) 「北琉球奄美方言における有生性階層—奄美大島浦方言と喜界島上嘉鉄方言・小野津方言を例に—」『広島経済大学研究論集』38(4): 111-133.
- 重野裕美 (2018) 「北琉球奄美大島龍郷町浦方言の尊敬動詞について」『広島経済大学研究論集』41(3): 25-59.
- ペラール, トマ (2016) 「日琉祖語の分岐年代」田窪行則・ホイットマン ジョン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語: 日琉祖語の再建に向けて』99-124. 東京：くろしお出版.
- Shigeno, Hiromi (2010) Ura (Amami Ryukyuan). In: Michinori Shimoji and Thomas Pellard (eds.) *An introduction to Ryukyuan languages*, 15-34. Tokyo: ILCAA.